

編集の序

昨今CT, MRIといった画像診断の臨床現場での必要性は増す一方である。CTの方は各臨床科の先生方もご自分でかなり読影されるようになってきたが、MRIは頭部や脊椎など一部の領域を除けば未だ“ハードルが高い”印象であることは否めない。その要因としてさまざまなことが挙げられるが、まず①読影する画像の種類が多い(例えば肝臓のEOB・プリモビスト®MRIなどは画像のシリーズだけで、当院の場合は14種類ある)、②そもそもいくつも並んでいる画像が、それぞれ何の画像であるかがわかりにくい、③その画像が何の画像(脂肪抑制T1強調画像、T2*強調画像 etc…)かはわかったが、自分の目の前の症例においてどういう意義をもつ画像かがわかりにくい、④何の画像か、そしてその意義もわかったが所見の読影が難しい、といったことが挙げられる。そもそもMRI検査を行う前に⑤この症例にMRIは必要なのか? CTでよいのではないかとか、⑥MRIはやろうと思うがオーダーするのに造影は必要なのか?、⑦うちの病院は3T装置と1.5T装置と両方あるんだけど、この症例はやはり3T装置の方がいいのかな?などと疑問は尽きない。本書『MRIに絶対強くなる撮像法のキホンQ&A』は、このような①～⑦の疑問解決に少しでもお役に立てることを念頭に置いて執筆させていただいた。

本書はいくつかのパートから構成されている。掲載順に紹介させていただくと、まずは目次、巻頭カラーに引き続き、本書で取り上げられている「略語一覧」が登場する。ここでは略語のフルスペルと和訳に加え、その本文での主な掲載ページも記載されているため、まずサッと眺めて気になる略語があれば、そのフルスペルや和訳を復習し、また詳しく知りたければその該当ページを読むという方法で略語の知識を増やすことができる。また巻末に索引もあるので、そちらのページも参照していただくとより完璧である。

「略語一覧」に引き続き「役立つシェーマ一覧」が登場する。本書はMRIの撮像法の基本や造影剤の使い方といった内容に留まらず、MRIの読影に必要な知識を画像解剖を含めて記載してある。いろいろなシェーマを掲載しているため、それらのシェーマを“画像解剖アトラス”的な意味合いでも利用していただければ幸いである。

「役立つシェーマ一覧」に引き続き「MRIの基礎について学ぼう!」の章となる。ここでは「そもそもMRIという画像はどういう原理で作成されているのか?」、「MRI

をCTと使い分けけるうえで、どういう利点、欠点があるのか?」, 「MRIにはどういう画像の種類があるのか?」, 「それぞれのMRI画像を得るための撮像法にはどんな種類があるのか?」, 「脂肪抑制画像や3T装置について」といった内容が記載されている。それらの内容について、既存の成書にあるような難しい記載は極力排除し、本書では臨床医の先生方に必要なエッセンスのみを記載させていただいた。まずはこの「MRIの基礎について学ぼう!」の章を何度か読み返していただき、2~3カ月後にまた読んでいただくと、MRIという検査に対して苦手意識はほとんどなくなるものと信じています。まずはこの章を読破していただいて、「MRI」をご自分の“手持ちの切り札”の1つに加えていただけると幸いです。

「MRIの基礎について学ぼう!」の章に引き続き、第1章~第8章は本書籍『MRIに絶対強くなる撮像法のキホンQ&A』の書名にもある“Q&A形式”で領域別にエッセンスとなる知識が散りばめられている。Q&A形式という読みやすい体裁になっているため、コーヒーを片手に目次のQ&Aをご覧になって、気になった箇所から読破していただければと思います。

本書は、当院放射線科の統括部長である山田哲久血管内治療センター長にご監修いただき、また堀田昌利先生をはじめ当院放射線科のスタッフに執筆協力いただいた。忙しいルーチンワークの合間を縫ってご協力いただいた先生方にこの場を借りてあらためて感謝するとともに、本書の企画段階から発刊まで誠心誠意取り組んでいただいた(株)羊土社編集部の秋本佳子氏、嶋田達哉氏をはじめ多くの編集部スタッフの方々に厚く御礼申し上げます。

本書がMRIを“自分の味方”につけるための足掛かりの本として、またすでにMRIにかかわっている先生方やメディカルスタッフ諸氏にはご自分の知識を復習したり臨床的な造詣を深める本として、また一度読破していただいた後は、おのおの臨床現場にて画像/撮像法やシェーマを参照する座右の書として、多くの先生方にご活用いただけることを願っております。

2014年3月吉日

日本赤十字社医療センター放射線科
扇 和之